

報道関係者 各位

2022年8月29日

パコパンパ遺跡における墓 (通称「プトゥート (巻き貝) 神官の墓」) の発見

報道解禁日 2022年8月30日午前0時 (日本時間)

国立民族学博物館(大阪府吹田市千里万博公園 10-1)では、国立サン・マルコス大学(ペルー)と、考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流の促進を目的として、学術交流協定を締結しております。この度、本協定に基づき実施しているペルー北部パコパンパ遺跡での発掘調査において、下記の発見がありましたので、お知らせします。

◆概 略:国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団は、2022年8月25日、ペルー北高地パコパンパ考古遺跡複合内のカピーヤ遺跡において直径約1m、深さ約1.5メートルの地下式墓を発見した。被葬者は1名、紀元前1000年頃の宗教的指導者と考えられる。右半身を上側に、屈葬状態で発見された。被葬者の頭部付近には、珪孔雀石(未同定)と貝(未同定)よりなる直径4~5cm大の円盤が連なる飾りが認められ、膝から脛(すね)、さらには足首の足にも、同じ材質の飾りが見られる。また被葬者の背中側には、遠くエクアドル沖で採れる希少なストロンブス貝(カプトソデガイ)が、少なくとも9個(現在発掘中で総数は不明)置かれ、その一部には刻線で文様が描かれていた。おもにこのストロンブス貝を中心に朱(硫化水銀)が撒かれていた。被葬者の性別は男性、年齢は20代後半から30代前半と判断される。

この墓は、同遺跡で同調査団が発見した「パコパンパの貴婦人」墓(2009年)、「ヘビ・ジャガー神官の墓(2015年)よりも200年~300年も前の墓であり、宗教的指導者が、かなり早くから誕生していたことを示している。

◆調査チーム:国立民族学博物館・ペルー国立サン・マルコス大学合同調査団

◆調査リーダー:関雄二・国立民族学博物館名誉教授・特定教授

◆調査責任者:フアン・パブロ・ビジャヌエバ ペルー国立サン・マルコス大専任講師

◆資金:日本学術振興会 科学研究費補助金(基盤A)「社会的記憶の観点からみたアンデス文明史の再構築」(代表 関雄二)

◆遺跡の位置:ペルー北高地カハマルカ州チョタ郡 海拔2500メートル

◆遺跡の年代:パコパンパI期 紀元前1200年~紀元前700年

パコパンパII期 紀元前700年~紀元前400年

◆編 年:I期もII期もアンデス考古学上、形成期と呼ばれる時代に属する。紀元前2500年~西暦紀元前後がこれにあたる。神殿における祭祀活動を中心に社会統合が図られていた時代。ほぼ同時代の遺跡としては、世界遺産に指定されているチャビン・デ・ワントル遺跡や、かつて日本調査団(団長:大貫良夫東大名誉教授)が発掘し、金製品を伴う墓を複数発見したクントウル・ワシ遺跡がある。

◆遺跡の特徴:日本・ペルー合同調査団は、2005年以来、ペルー北高地最大のパコパンパ遺跡と呼ばれる形成期神殿を発掘調査してきた。この遺跡では、緩やかに連なる自然の尾根を利用した約4ヘクタールの範囲に三段のテラスが築かれ、最上段に遺構が集中する。一方で、この遺跡の周辺には、複数の関連遺跡が存在し、およそ16ヘクタールの全体をパコパンパ考古遺跡複合と呼んできた。今年の発掘(7月25日~9月3日)は、こうした関連遺跡の一つであるラ・カピーヤで行われている。ラ・カピーヤ遺跡は、パコパンパ遺跡の東側、およそ600m離れた場所にあり、これまで2015年、2019年、2021年に発掘を実施してきた。そこではパコパンパI期にあたる擁壁(基壇を支える壁)などを発見している。

ラ・カピーヤ遺跡の建築の全体像はいまだに不明だが、パコパンパ遺跡では、中央神殿からのびる建築上

の軸を中心に左右対称に建物を配置していたことがわかっており、その中心軸を東側に伸ばした場所にラ・カピーヤ遺跡が存在する(添付図参照)。その意味で、紀元前 1000 年頃には、遺跡複合全体を計画的に整備した大神殿複合が完成していたことは確実である。

◆墓と副葬品の位置

ラ・カピーヤ遺跡では、パコパンパ遺跡と同じⅠ期(紀元前 1200 年から 700 年頃)の建築が発見されてきた。今年の調査では、大基壇上に築かれた小基壇とそれに隣接する小部屋が発見されている。この小部屋から小基壇を上る階段を上りきった床面に墓が設けられていた。正確には、階段の袖壁の一部が墓の上ののっているため、階段を敷設する直前に墓が設けられたことがわかる。墓の建設と階段の建設との間の時間的な隔たりはまだわかっていない。

墓抗の切り口は円形を呈し、直径は約 1m である。深さは約 1.5 メートルの地下式墓である。下部に行くにしたがってやや墓室が広がるが、おおむね円筒形を呈する。深さ 90cm まで、礫が詰まっており、その下から 1 トンはあろう巨石が現れた。1 日がかりで、この巨石を撤去したところ、埋葬が出土したことから、巨石は蓋石と考えられる。

被葬者は 20 代後半から 30 代前半の男性で、南北方向に身体の軸を保ち、右を上にした屈葬状態で見つかった。パコパンパ遺跡方向に顔を向けるように、意図的に安置されたと考えられる。

副葬品としては、被葬者の頭部に、緑色鉱物(珪孔雀石か孔雀石)と貝(未同定)でできた直径 4~5cm の円盤状の飾りが巻かれ、同素材の首飾り、胸飾りも身につけていた。首飾りや胸飾りの飾り玉は、大きなもので 2cm、小さなものでは 1.5mm ほどである。また足首にも同様の飾りがつけられていた。

また、身体の下部から背中あたりに、少なくとも 9 つの大型ストロンブス貝(カプトソデガイ)が置かれ、貝には赤色顔料(おそらくは朱)が撒かれていた。

◆被葬者の情報

本プロジェクトの自然人類学担当の長岡朋人青森公立大学教授によるリモート鑑定によれば、被葬者は男性で 20~30 代である可能性が高い。頭蓋変形の有無など詳しい分析は来年以降に行う。

◆意義

アンデス文明初期の社会は、一般に、国家や王国が存在する前の比較的平等的な社会と考えられているが、これまで日本調査団が手がけたクントウル・ワシ遺跡の結果などを考慮すると、形成期の後半(紀元前 800 年~700 年)には、神殿で執り行う儀礼など宗教面をつかさどる集団(指導者)が次第に権力を掌握していったと考えられている。パコパンパ遺跡でも、例外ではなく、Ⅱ期(紀元前 700 年~400 年)に入るとこの傾向が顕著になると考えられてきた。「パコパンパの貴婦人の墓」(2009 年)や「ヘビ・ジャガー神官の墓」(2015 年)もその証拠としてとりあげることができる。それらの墓では、金製品の副葬、施朱の他、被葬者には頭蓋変形が認められた。頭蓋変形は、生後まもなく施すことで頭蓋を変形させることから、生まれながらにしてリーダーとなる運命にあった人物が誕生していたことを物語っている。

一方で、それ以前のⅠ期の時代には、ほとんど墓が見つかっていなかった。パコパンパを含めた周辺の景観を大々的に改変し、数多くの建物を計画的に建てた時代ながら、Ⅱ期のようなリーダーの存在をうかがわせる証拠は極めて乏しかった。今回の墓では、大量の貝、緑色鉱物(珪孔雀石、あるいは孔雀石)製品のほか、中央高地から入手したと考えられる朱、そして遠くエクアドル沖の暖流産の巻き貝を副葬していた点は注目に値する。とくにストロンブス貝は、これまで世界遺産に登録されているチャビン・デ・ワンタル遺跡や、日本調査団が発掘したクントウル・ワシ遺跡でのみ発見されている珍しい貝であり、有力なリーダーだけが保有することができる希少財として知られている。儀礼における楽器として利用された可能性が高い。表面に図像が施されることもしばしばあり、今回見つかった貝の一つに刻線が確認されている。パコパンパ遺跡では、水道敷設工事現場より、未確認の脈絡で出土したストロンブス貝はあったが、今回のように確実な脈絡で、しかも 9 個も発見されたことは驚きとしかいいようがない。しかも、チャビンやクントウル・ワシの事例は、今回墓よりも 200 年近く後の時代のことである。

このように、今回の墓は、Ⅰ期、いわゆる形成期中期に遡る時期に、遠隔地からの希少財を入手し、儀礼に

活かすような宗教的指導者の存在を明らかにするものである。繰り返すが、アンデス文明において、これまで権力者の確実な登場を紀元前 800 年頃としてきた点を 200 年から 300 年近く遡らせることになった学術的意義は大きい。

なおパコパンパ村では、観光ビジターセンターの建設が、ペルー国政府観光省によって推進されることが 8 月に発表されている。パコパンパ村民のみならず、本調査団ならびにカハマルカ州政府の努力によって実現されつつある。

問い合わせ

調査リーダー: 関雄二・国立民族学博物館名誉教授・特定教授

※連絡先は国立民族学博物館 総務課 広報・IR 係までお問い合わせください。



©パコパンパ考古学調査団

[プレスリリースお問い合わせ] 国立民族学博物館 総務課 広報・IR 係
電話:06-6878-8560(直通) 平日 9:00~17:00 Fax:06-6875-0401 Mail: koho@minpaku.ac.jp
プレス向けウェブサイト www.minpaku.ac.jp/press